＜前回＞教皇と皇帝

・西欧中世のダイナミズム：内的要因としての政治
・権威と権力の相補性、あるいは上と下との照応関係　→　政治神学。
・温順な気候（11 世紀から 13 世紀）：西欧中世の発展期

（１）フランク王国と教皇

１．カロリング朝(ル＝ゴフ、8 世紀から 10 世紀の「流産したヨーロッパ」)とキリスト教

・カール大帝：ローマ教会を守護する西欧の皇帝。聖戦を貫徹し、カトリックのヨーロッパを拡大。グレゴリウス 1 世が構想したローマの守護者。レオ 3 世によって皇帝の冠、ローマ皇帝となる（800 年 12 月 25 日）。キリスト教的な皇帝となる。

２．神聖ローマ帝国へ。皇帝の圧倒的な優位。

・オットー 1 世（912-73）：神聖ローマ帝国の開祖。
　塗油＝皇帝の聖化、聖俗両面の最高位。ドイツや帝国における大司教や司教の選出に関与（候補者のなかから選ぶ、あるいは自ら候補者を選ぶ）。国王が教会の頂点、宮廷が教会の中心。

・聖と俗が絡み合う体制＝王国（帝国）教会制。国王は聖戦を行いうる。
　↓
「オットー大帝の特許状」（926 年）。「ドイツ国王や神聖ローマ帝国のほうがローマ教皇よりも力の点で圧倒的に強く、威信の面でもより高かった」、「皇帝はキリストの代理人だったが、ローマ教皇はキリストの使徒である聖ペトロの代理人」（山内、51）

・聖俗の未分化。
　↓
「十字軍が可能になるには、ローマ教皇権の強化が必要だった。」

（２）グレゴリウス改革と教皇革命

３．フランスでは 10 世紀頃、王国の秩序が解体＝王権が弱体化し、領主は自由農を隷属化させる（「新しく、厳しい領主制」）＝封建革命。
　三身分（聖職者、騎士、農民）の確保（1020 年頃）。祈る人戦う人の峻別。
　↓
　10 世紀後半から 11 世紀初頭。聖職者が武器を携帯し、妻もしくは妾をもち、聖職売買することは不正であるという意識の一般化。
　キリスト教の浄化を求める教会刷新運動＝皇帝権力の排除

４．グレゴリウス 7 世：
　ラテラノ公会議(1059 年)：「教皇選挙教令」と「聖職売買（シモニア）禁止令」。
　　皇帝の干渉を排除、シモニアおよびニコライズム（妻帯、性的放縦）の禁止。

５．「神の平和」運動。聖職者の武器の放棄、弱きものに暴力を振るわない約束。
　聖職者から武器と世俗性を奪う。

（３）叙任権闘争：聖俗の抗争あるいは再編

６．世俗権力から聖職者が土地財産そして聖職（司教職）をも授与される仕組み
　腐敗の根源
　教会の自由と世俗権力からの解放を求める教皇庁と対抗するドイツ皇帝

７．グレゴリウス改革

８．「カノッサの屈辱」の意味

９．1122 年。ヴォルムス協約によって、教会に司教選出と叙任の自由および十字架と指輪授与による叙任の権利を与え、皇帝には被選出者への牧杖による俗権の授与を認める。グレゴリウス改革の理念が貫かれる。
　教皇は権威を高め、教会は世俗的な権力・富力を蓄積。その力は、13 世紀初頭（イン

ノケンティウス 3 世）において頂点。

（4）十字軍とその射程

10．第一回十字軍：1096 年。

ウルバヌス 2 世のプロパガンダ。

・ローマ教皇が「勇敢なる兵士たち」に呼びかける。呼びかけるのは皇帝ではなく、教皇。

・「汚染された聖地」の解放＝浄化。キリスト教的浄化の思想。

↓

11．民衆の新しい宗教意識と連動。托鉢修道会の背景。

十字軍が呼び覚ました浄化思想は、異端運動として顕在化し、別の十字軍を呼び起こした。

あるいは、十字軍の変質（第 4 回十字軍、1202-04。コンスタンチノープルを占領しラテン王国をたてた）。

「政治的安定化、農業・商業の回復・展開、都市、民衆、異端、修道制、グレゴリオス改革」は、一つの運動、西欧中世の生成過程の中にある。

６．イスラームと１２世紀ルネサンス

（1）中世は暗黒時代ではない

１．中世社会の変動と新しい宗教性の展開

・農業革命　→　都市の発展、都市のネットワーク

・都市民衆の宗教性　→　市民層の形成と devotio moderna

・異端的民衆運動と教会の対応

・グレゴリウス改革、教皇革命

十字軍（アルビジョア十字軍）

新しい修道院運動（ドミニコ会、フランシスコ会）

２．大学の時代、中世科学の進展。

外的要因としてのイスラーム

中世キリスト教世界のダイナミズムは、中世の外部としてのイスラームとの相互関係なしには、理解できない。

断続的に繰り返されるルネサンス（イタリア･ルネサンスはその最後の波）

３．カロリング朝ルネサンス

「カロリング朝期に生まれたヨーロッパの内でもっとも評価すべきもの、それはおそらく文明のヨーロッパである」、「シャルルマーニュにとって、知、教養とは、欠くことのできない権力を誇示し、行使することであった。知識を奨励し保護することは、君主の基本的義務のひとつである。」（ル＝ゴフ『ヨーロッパは中世に誕生したのか？』藤原書店、96）

「帝国の一部ではない国々を代表する者たちさえ、それに加わることが許された。たとえば、アイルランド人、アングル＝サクソン人、スペイン人がいたのである。」

「七八一年以降、大帝のまわりにさまざまな教養人、知識人が取り囲むようになる」、「宮殿知識人」。「ランゴバルト人パウルス・ディアコヌス」「イタリア人アクイレイアのパウリヌス」「スペイン人」「テオドゥルフス」、「アングル＝サクソン人のアルクイン」（97）

「皇帝の宮殿は真に文化的な雰囲気とともに、遊び心に包まれてもいたのである」、「宮殿アカデミー」（98）

「学者たちの第二波」「敬虔王ルイ、禿頭王シャルル」「宮殿のほか、あたらに建設された大修道院がその中心地」、「アインハルト」「ラバヌス・マウルス」

「カロリング朝の知的活動がヨーロッパ文化の古層を形づくったという事実」「国家の統治における知の重要性、それがもたらす権威を、シャルルマーニュは「古典を学ぶことについて」と題する法令で強く訴えている」

「書体改革」「カロリング小文字体は、明快で、規則正しく、上品であり、読むのも書くのもやさしくなっている」、「アルクインは」「句読法を導入」、「聖書の本文を修正させた」、「正しい原文の追求」（99）
「彩色写本」、「装飾写本」、「九世紀はまた、西洋の宗教建築の未来にとって非常に重要」「象徴的な意味をもつ翼廊の導入」（100）、「ローマのバシリカ式の直線的平面形式に十字架の形を取り入れた」、「西構えが出現する」「ロマネスク教会やゴシック教会西正面を予告」（101）

（２）イスラームとキリスト教世界
313:キリスト教の公認
375:ゲルマン移動開始
395:東西ローマ帝国の分裂
476:西ローマ帝国の滅亡
529:アカデメイアの閉鎖、モンテ・カシーノ修道院の創設
622:ヘジラ元年（ムハンマド、メッカからメディナへ）
661:ウマイヤ朝
732:トゥールの戦い（カール・マルテル、サラセンを破る）
750:アッバース朝
962:神聖ローマ帝国の建設
969:ファーティマ朝
1037:セルジュク・トルコ
1096:十字軍の開始
1170:パリ大学創設
1204:第 4 回十字軍
1251:グラナダを残し、レコンキスタの完了
1258:アッバース朝滅亡

ウマイヤ朝のイベリア半島征服（アッバース朝に滅ぼされたウマイヤ王朝の王族がスペインに逃れる。アンダルシア王国。アンダルス：ムスリムの統治領域）
コルドバ：711 征服、755 アブド・アッラフマーン到着、756 統治宣言
トレード：712
バルセロナ：713

４．自然学、古代ギリシャからキリスト教世界へ
古代ギリシャの自然学（古代科学）→東ローマ帝国→ペルシャ帝国→イスラーム世界→中世ヨーロッパ世界（イベリア半島など。平和的共存と軍事的接触）
12 世紀ルネサンス、13 世紀中世科学・スコラ：修道院から大学へ
キリスト教的古代から中世までの全体において、文化は東から西に伝播している。
５．十字軍における軍事的接触とは別の経路・別の交流
イベリア半島における三宗教共存（寛容の文化）の一つの可能性
哲学（アリストテレス）、科学（自然学）、建築、文学（11 世紀のイスラームにおける愛の伝統が、トゥルバドゥールの発生を刺激した。ロマンティック・ラブの成立(伊東、1993、227-270)）の相互交流。
レコンキスタによって平和的共存は終焉 → 強制改宗か追放かの時代へ。
マラノか亡命か
６．「アンダルスは七〇〇年以上、アメリカ合衆国のざっと三倍にもおよぶ期間にわたっ

てヨーロッパにイスラームが存在したことの、まごうことなき印である」（メルカル、6）
「ヨーロッパ最後のイスラーム都市国家グラナダは、一四九二年に征服され、「モーロ人」はユダヤ人とともにスペインから追放されることになった」（7）
「相反するものの集合体という意味での文化の核心はまさに、アンダルスに存していた。だから、わたしたちは中心に地中海をおいてヨーロッパの地図を再構築し、アンダルスのまなざしを介してわたしたち自身の物語を語りはじめなくてはならない。深くアラブ化したユダヤ人がヘブライ語を再発見、いや、ふたたび創案したのはまさしくアンダルスにおいてであった。イスラームの統治下で生活するキリスト教徒ばかりか、イベリア半島における政治的支配を奪還したキリスト教徒までもが、哲学などの知の様式からモスクの建築様式にいたるまで、アラブ的様式のあらゆる面を受容したのもまさにそこであった。アベラールやマイモニデスやアヴェロエスのように、揺るぎない信念の徒が、それぞれの信仰を横断して、哲学的、科学的、宗教的事実を追い求めるなかで、いかなる矛盾にも出会わなかったのもやはりそこであった」（8）
「コルドバの図書館は、学芸にかぎらず、社会全体の栄光を雄弁にものがたる重要な指標である。それはまさに、物質的な富と知的な財産とがちょうど交差する十字路のようなものだからである」（32）
「共存という社会実験」「征服後の社会では、キリスト教徒が主体となってムスリムとの共存という社会実験が行われることになったのであり、これはヨーロッパ史上初めての試みであった。」（小澤、271）
７．ヨーロッパを移動する人々による知と文化の交流・伝達
　聖地巡礼、移動する労働者（ギルド・職人、商人）、外交交渉、学生・説教者、マイノリティー（女性、ロマ、ユダヤ人）、
・コペルニクス（1473-1543）の場合：ポーランド王国のワーミア司教区（現在の北部ホーランド）のフロムボルク聖堂参事会員（聖職禄をもつ教会行政官）。イタリアに留学に、医学と教会法を学ぶ。イタリア留学中に天文学に関心を持つ。独自に考えた天文学の概要を『コメンタリウム』（ニコラス・コペルニクスの小論。コペルニクス『天体回転論』みすず書房、に所収）という題の小論文として書き上げる。さらに、1530 年頃に『天体回転論』を書き上げ、人目につかないようにしまい込み、修正を加える。コペルニクスの『天体回転論』の出版を勧めたのは、ルター派のプロテスタントのレティクス（コペルニクスの弟子になる）であり、レティクスは印刷の監督をオジアンダーに依頼。オジアンダーは無署名の序文を付けて印刷完成。出版は 1573 年で、コペルニクスの臨終の床に届けられた。死後 73 年が経過した 1616 年に（16 世紀後半を通じて、カトリックとプロテスタントの双方で広く読まれ、しばしば研究された）、「訂正されるまで」読んではならないとの指示とともにカトリック禁書目録に載せられた。1835 年にガリレオの著書ともに禁書目録からはずされる。

（３）中世科学と 12 世紀ルネサンス
８．イスラーム科学：8 世紀のアッバース革命、この王朝の下でのイスラーム科学（8 世紀から 15 世紀）の黄金時代（8 世紀から 11 世紀は西欧科学を圧倒、12 世紀からラテン世界へ流入）、アラビア語による科学。イラン人、トルコ人、ユダヤ人など。
９．12 世紀ルネサンスの開始：大翻訳運動、アラビア語からラテン語へ
「十二世紀ルネサンスの知的回復運動の中心となったところはどこかと言えば、それは一貫してスペインとイタリアであった」「北東スペイン学派」「トレード学派」「日田イタリア学派」（伊東、1978、220）
「北東スペイン学派」「カタロニア」「ピレネー山脈かエブロ河に至る」
「近代西欧科学の知的源泉をたどるならばほとんど、この中世ルネサンスの知的所産にゆ

きつく」(233)

「こうした「一二世紀ルネサンス」の結節点となったのが、イスラーム世界との接点の多いシチリアとスペインであった。シチリアとスペインの翻訳活動を通じ、西ヨーロッパにアリストテレス哲学、や新プラトン主義、自然科学の様々な知、イスラーム世界の知的伝統が紹介され、「一二世紀ルネサンス」と呼ばれる西ヨーロッパ世界の知的復興運動が生じたのである。」(関、151-152)、『イスラーム哲学とキリスト教中世』全三巻、岩波書店。

↓

13 世紀以降の西欧中世の科学的発展

10.「数学的合理性」＋「実験的実証性」→　近代科学

14 世紀の運動論の二つの流れ：ガリレオの先取者たち

オックスフォード学派：ブラドワーディン、運動論の数学的・計算的問題

パリ学派：オレム、ビュリダン、運動そのものの基礎原理の解明＝インペトゥス理論の展開

＜参考文献＞

１．クラウス・リーゼンフーバー『中世思想史』平凡社ライブラリー。
２．小澤実他『辺境のダイナミズム』（ヨーロッパの中世３）岩波書店。
３．関哲行『旅する人びと』（ヨーロッパの中世４）岩波書店。
４．マリア・ロサ・メノカル『寛容の文化――ムスリム、ユダヤ人、キリスト教徒の中世スペイン』名古屋大学出版会。
５．伊東俊太郎『近代科学の源流』中央公論社、1978年。
『十二世紀ルネサンス――西欧世界へのアラビア文明の影響』
岩波セミナーブックス、1993年。
６．Ｃ・Ｓ・ルーイス『愛とアレゴリー――ヨーロッパ中世文学の伝統』筑摩書房。
７．上尾信也『歴史としての音――ヨーロッパ中近世の音のコスモロジー』柏書房。
８．コペルニクス『天体回転論』みすず書房。
９．Ｏ・ギンガリッジ、Ｊ・マクラクラン
『コペルニクス――地球を動かし天空の美しい秩序へ』大月書店。
10．Ｒ・ホーイカース『最初のコペルニクス体系擁護論』すぐ書房。